

特集：ガスタービンの世界で活躍する女性研究者・技術者

## 女性が職業を持つ意義

仲俣 千由紀<sup>\*1</sup>  
NAKAMATA Chiyuki

キーワード：女性，技術者，ワークライフバランス

### 1. 進路の選択

本論を展開するに先立ち、まず私自身について少し紹介させていただきたい。生まれてから高校を卒業するまで、福岡県北九州市で過ごした。中学の頃から、理数系の科目が好きで、高校2年で文系・理系の選択を行う岐路に立った時は何の迷いもなく理科系進学コースを選択した。高校3年で進学先を検討する段階では原理を探究するというところに憧れ、理学部への進学を選択した。大学で理学部物理学科へ進学し、4年次に実験系の物性物理の研究室に入り、磁性体の研究を行った。当時も研究色の強い仕事につきたければ修士まで行くというのが一般的であったため、大学院に進学し磁性体の研究を続けた。大学院修士課程までは、ご覧のとおりで、様々な選択を行ってはいるが、自分自身で大きな選択をしたという実感はなく進んできた。

人生で大きな選択をしたと感じるのは大学院修士課程2年の時である。博士課程には進まず、修士課程を修了したら就職するつもりでいた私は、就職先をいろいろと検討し始めた。私の行っていたテーマは非常に基礎的な物理学であったので、大学での研究テーマがそのまま就職後の業務に直結するような就職先は全くなかった。よって、大なり小なり、就職を機に新しいことを始めることになるという覚悟はあった。とはいえ、磁性体関連ということで、電子記録媒体を作る会社などを検討していた。そんな折、卒業生による会社説明会が学校で開催され、そこで弊社に勤務する先輩と知り合うことになった。これが今思うと人生を左右する出会いであった。先輩に案内されて訪れたIHIでは、航空エンジンを間近に見ることができ、大変感動したことを覚えている。これまで原子分子の世界を取り扱ってきた私にとって、大きな機械を見ること自体が新鮮であった。また、働く人々が皆生き生きと仕事をしている姿、自分の仕事を楽しく語る姿が印象的で、ここで働けたらと思うようになった。全くの白紙から始めることになるという事に悩んだが、未知の世界に飛び込む覚悟を決め、IHIへの就職を決めた。

### 2. 私の仕事

平成5年にIHIに就職し、航空宇宙事業本部技術開発事業部研究開発部（現：航空宇宙事業本部技術開発センター要素技術部）に配属された私は、ガスタービンの世界に飛び込むことになった。私はタービンの冷却設計および技術開発を担当することになった。工学に不慣れな私は戸惑うことも多かった。今でも鮮明に覚えているのは、「経験式」への戸惑いである。理学の世界では、現象を表現する数式は主として演繹的に求められるが、工学の世界では帰納的に導出された「経験式」が多用される。この考え方が理解できなかった事を今でも思い出す。

入社した頃は、エンジン開発の要素研究が立ち上がった頃で、入社後すぐに冷却設計を担当した。当時の私には、設計パラメータを変えた際に、どこにどのような影響が出るかも予想できなかったため右往左往し、職場の上司・先輩に大変お世話になった。この後、私は職場が変わることなく、タービン冷却設計・開発に従事し、もうじき20年になろうとしている。

### 3. プライベートについて

実は私には3人の子供がいる。そろそろ一人前に仕事をするようになろうかという5年目で最初の育児休業を取得した。それから1年働いては1年育休をとるという事を繰り返した。ちょうどこの時期、エンジンの新規開発が始まる頃で、職場が非常に忙しいところに大変な迷惑をかけてしまったのであるが、職場の上司・同僚に協力をいただき、職場復帰を果たす事が出来た。育児休業から復帰しても、子育て世代の親はいつ何時休まねばならない事態に陥るとも限らず、残業はできないなどの制約の中であるため、長期間に渡り、職場には理解・支援をいただきながらの勤務にならざるを得ない。私は幸運にもそういう状況に理解をいただき、仕事を続けることができた。

### 4. ワークライフバランス

3回の育児休業を取りながら、現在も働き続けているという事で、今回、この記事を書かせていただく機会をいただいたものと信じて疑わないのであるが、であれば、ワークライフバランスについて意見を述べることに私に

原稿受付 2012年8月3日

\*1 (株)IHI

〒190-1297 東京都西多摩郡瑞穂町殿ヶ谷229

課せられた使命であると思う。

ワークライフバランスについて社会でも取り沙汰されているが、このバランスを取るのは非常に難しい。詰まるところ、それぞれが自分の中で折り合いをつけていくしかないであろうというのが、現在の私の思うところである。

このバランスは一定ではなく、変化するものである。子供が小さいうちは「ライフ」の比重が大きくなるを得ないし、仕事人生が長くなると責任が重くなるので、次第に「ワーク」の比重が増えてくる。働き続けるためには、この比重の変化に対し、なんとかバランスをとれる範囲に収める必要がある。比重の変化に関して、私のこれまでの経験から、出産／育児にかかわるワークライフバランスに関して個人的見解を以下に述べさせていただく。今後、後に続く方々の参考にしていただければ幸いである。

私は、「仕事が忙しいので、出産の時期を考えてしまう。」という話をよく聞く。このような悩みを持つ方が本当に多い。私のこれまでの経験を振り返ると、この辺りは暇になるという見通しが立つことはないように思える。年齢が上がるほどに責任も増し、どんどん忙しくなるものである。キャリアを考えた上で、この辺りがベスト！などという一般論は残念ながら導き出せていない。現在は出産・育児に関わる制度が整ってきているので、制度を活用しながら、仕事を続けることは十分に可能と考える。

次にお話したいのはライフのバランスが大きくなる時期についてである。子供が未就学の時期は言うまでもない。これは誰もが認めているため、比較的体制や制度は整っている。この時期の子供の昼間の生活は保育園がしっかりとサポートしてくれている。(待機児童問題は脇に置いて話を進めさせていただいている。) 保育園は、親が働いている家庭ばかりが集まっているので、行事その他も、仕事を持つ親に配慮されたものとなっている。仕事を持つ親にとって、最も困難な時期は小学校時代であると私は考えている。小学校では、「昼間家にいる母親」が前提で全てが計画されている。何事も平日の昼間に行われるのである。子供が少なくなっているのに、PTAの役員も避けては通れず、どこかで時間のやりくりで苦勞することは避けられない。PTA役員は母親の聖域なのである。会長以外は全て母親で構成される。ひとつ象徴的な話をしよう。4月の懇談会はPTA役員を決める場である。それまで役員を引き受けてない者は欠席を憚られる。ある時、私はどうしても会社の仕事を休めなかったため、その日の懇談会への出席を夫に頼んだ。役員決めの場面になり、夫も「まだ役員やってません。」と正直に手を挙げたそうである。その日の役員決めは困難を極めたそうだが、夫には全く何をふられることもなかったという。まるでいないがごとくに扱われたとのことであった。この件があって、我が家では、「4月の懇談会にはお父さんに全部出席してもらおう。」と冗談を言っていたが、つまり、男性は役員として考えられない

ということなのである。ここまで極端な話は私の住む地域の特殊事情なのかも知れないが、母親中心の活動であることは疑いないと思われる。小学校教員の半数ぐらいが男性になると、仕事を持つ者の視点で活動が計画されるようになり、活動そのものが大きく変わると私は思っている。女性が働きやすい社会になるには、男性の側がこれまで女性の領域であった部分に踏み込んでいただくことも必要なだと私は考える。

## 5. 職業を持つという事

ほとんどの女性が一旦は職業に就くが、結婚または出産を機に退職という選択をする女性が日本にはまだまだ多い。日本では家事における女性の負担が大きく、退職という選択をするのだと考える。確かに結婚後、特に出産後に職業を持ち続けるという事は、職業としての仕事に加えて、プライベートでも家事という仕事加わり、めまぐるしい日々を送ることになるのだが、敢えて職業を持ち続けるという選択をすることで得られることについても触れておきたい。職業を通じて得られるものは自分自身の成長であると私は思っている。職場での業務を通じてしか得られない経験がたくさんある。以前は難しかった事が出来るようになったことに気付いて自分自身の成長を感じた時や、困難な課題をみんなで力を合わせて乗り越えたときの達成感は何物にも代えがたい経験である。毎日いろんなものに追いかけてられながら、なんとか一日ずつを乗り切るような日々が続いても、それでも会社を辞めないで頑張ろうと思うモチベーションは、職業を通じて得られる経験がかけがえのないものだと思うからである。そうとはいえ、自分の体は一つだし、一日は誰にも等しく24時間である。であるからには、どこかで何かを削らないと一日を回せないだろう。お恥ずかしながら私の場合は家事のレベルをぎりぎりまで落としている。もはや「健康で文化的な生活」ではないかも知れない。このような状況の中、家族にも相当に協力してもらいながらなんとか日々を回しているのである。こんな私でもどうにか職業を持ち続けられているということで皆さんに肩の力を少しでも抜いていただければ幸いである。

## 6. 技術者を目指す方たちへ

思うままに書き散らしたが、何かご参考にしていただける事があったであろうか。これから技術者を目指す女性の皆さんに対しては、「成せば成る」の心持ちで前進していただきたいと思う。まだまだ女性が職業を持つことに対して課題は残されているが、少子高齢化社会に向かう日本では労働力確保の観点、財政的な観点からも、女性の社会進出に対して間違いなく追い風が吹いている。現在山積する課題も次第に解決させるであろうし、何より、社会進出する女性が増えることで課題解決のスピードも速まるであろう。是非、臆することなく、夢をかえていただきたい。